

# いじめ被害体験と教職志望動機の関係(実践報告)

明星大学教育学部教育学科 特任教授 神 田 正 美

## 抄録

国立教育政策研究所が行った小中学校6年間の追跡調査の結果、仲間はずれ、無視、などの軽度のいじめに関しては、全児童・生徒のうち9割が何らかの形で関わっており、しかも被害者・加害者、どちらにもなるという。被害者の中には、担任教師のまづい対応によって辛い思いをしている児童・生徒がいる。該当児童・生徒は学校不信に陥ることが危惧されるが、学校の教育力そのものに対する信頼は逆に強く存在しており、なかには教師を目指す者がある。履修した学生の作文をもとにいじめ指導について「教職入門」の授業を行った。

キーワード いじめ 教職志望動機 教職入門

## 1 はじめに

3月まで公立中学校の校長を務めていた筆者は、校内で起こるいじめについて、学級担任や学年主任から報告を受け、解決に向けた対応を指示したり、場合によっては自ら保護者と面談したりということを日行的に行ってきた。いじめはどの学校でも起こるものであり、いじめ問題に対する正しい認識と確実な対応力は教師に強く求められている。

しかし、いじめが原因で命を落とす事件が後を絶たず、事件が報道されるたびに問題になるのは学校への不信である。教師の対応や学校の体制が問題視されるのを知りながら、教職を目指す学生たちは、何を考えているのだろうか。

今年度前期、筆者は1年生の「教職入門」2コマを担当した。対象は教育学部教科専門コース120名と理工学部教職課程履修者85名の計205名である。受講生の中で、いじめの体験がもとで教職を目指した者が18名いた。

彼らの作文には、いじめに遭って苦しい時間を過ごしたことが述べられている。彼らの体験は二通りに分類できる。いじめの窮地から救ってくれた教師がいて、その教師を尊敬する念が強く、自らも教師を目指したというケース。もう一つのケースが、いじめを解決してくれなかった教師に対する非難の念が、自らが教師を目指すきっかけになったというものである。

公立中学校で教員として勤めてきた筆者は、後者の作文を自分が責められているような痛みなく読むことができなかった。彼らが辛い思いをした年月を想像すると、自分がその学校に勤めていたわけではないのだが、同じ教員の立場から申しわけなく思うのである。しかし、ここで確認しておきたいのは、前者のケースも後者のケースも、学生の心に、いじめは学校教育で解決できるという期待、あるいは信頼があるということである。いじめは顕在化しにくく、陰湿に長期間続く。ところが、学校あるいは教員はそれを発見し、解決することができるはずだという期待が学生の心中にある。

## 2 学生の作文(私が教師を目指そうと思った理由)

前期、教職入門の第1回授業で、履修者全員に「私が教師を目指そうと思った理由」という題で作文を

課した。様々な理由が書かれていたなかで、いじめを理由に挙げた学生が205人中に18名あった。1割に満たない人数であるが、学生の強い思いが綴られている。5人の文章から引用する。

### (1) いじめを解決した先生を尊敬して教師を目指す

#### A(女子)

小学校6年生の時、私は友人たちからの過ぎたいやがらせにとっても困っていました。しかし、これは周りの人から見れば遊びの範疇で、自分が考えすぎなのではないか、そう思ってしまい、両親にも、もちろん先生方にも言い出せずにいました。ですが、担任の先生は私が何も言わずとも察してくださり、先生の前で起こったことに対して、さりげないフォローをしてくださり、遂に私が階段から落とされかけた時にはいくつかの解決策を用意してくださったうえで、「どうしたい?」と聞いてくださいました。先生は私にとっての最善の策でこのことを解決してくださいました。私は先生のように子どもの心に寄り添い、子どもの心の変化にいち早く気付くことができ、そしてその対処法を用意でき、子どもにとって最善の策を取れるだけの力をもった教師になりたいと、このころからずっと思っています。

#### B(男子)

小学6年生の時、私はクラス内でイジメの対象になったのです。子どものイジメだからといって他から見えてわかりやすいものでなく、本当に陰湿なイジメでした。私は誰にも言えないまま日々を過ごしていると、ある日、クラスの担任が「イジメられてないか?」と一言私に言ったのです。今までイジメられていたことを、親でさえ気づいてくれなかったのに、ズバリ言い当てられた時、私は喜び半分驚き半分でした。ここで初めて、教師とは教室を明るく照らす太陽だけでなく、子どもの心の暗い部分を見抜いてくれる月のような人でもあるんだなと思いました。

### (2) いじめを解決できない先生への嫌悪感から教師を目指す

#### C(女子)

こんな教師にはなりたくないという教師像があります。それは、高校1年生の時の部活の顧問の先生だったのですが、私が、「部活の中で嫌がらせを受けている。どうしたらよいですか」と相談した時に、「そんなのお前の思い違いだ。あいつらがそんなことするはずがない。嫌ならお前が部活を辞めろ」と言い全く相手にされなかったのがとても辛かったからです。この時私は、この先生は最低だ、こんな先生には絶対になりたくない強く思いました。

#### D(女子)

小学校3年生の時、あるきっかけから、毎朝学校に行っても同級生に教室から閉め出されるようになった。毎朝、入れないので担任が来るまで教室の外で待った。毎朝私が外で待っているのを見て、何も対応してくれない担任。初めて教員に不信を抱いた。

### (3) いじめを解決したいので先生を目指す

#### E(男子)

私は小学校3年生から4年生の時、クラスの児童にイジメを受けました。上履きを隠されたり、暴言を言われたり、恥ずかしいことをさせられるなど、様々なことをされました。当時の私は、母親や父親、先生や友人などに相談することが怖く、一人で抱え込んでしまいました。その結果、4年生の2学期に3日ズル休みをしました。異変を感じた母親は、担任の先生に連絡し、はじめてイジメがあることが明らかになりました。その後、イジメはなくなりましたが、心の傷はすぐには治りませんでした。私はこのようなことが再び起きないために教師を目指すと思いました。

(1)のA(女子)、B(男子)は、いじめを教師が解決した例である。被害に遭っていた子どもにとって教

師は「太陽」であり、「月」のような存在でもあった。

一方、(2)は、子どもがいじめを訴えたり、明らかなサインを送ったりしているにもかかわらず、それをいじめと認識せず、子どもを救えなかった教師の例である。しかし、引用したC(女子)、D(女子)は二人とも教師への嫌悪感だけが教職を志望した動機になっているわけではない。嫌悪感や不信感を抱いた経験があったものの、尊敬すべき教師にも出会っており、憧れの感情が嫌悪感に勝っていることが、引用していない部分に記されていた。ここでは、いじめに対して適正な対応ができなかった教師は子どもに負の影響を与えていることを認識しておきたい。

(3)のE(男子)はいじめそのものを許さないという観点から、自分が教師として働きかけたいという決意を述べている。いじめ問題が学生の心に深く刻まれたことが分かる。

### 3 いじめは大学生にとって身近な問題

国立教育政策研究所の調査によると、いじめはどこの学校でも起こりうる。また、加害者は被害者に転じること、逆に被害者が加害者に転じることよくあることである(注1)。子どもにとって、いじめは、学校生活を送っている以上、常について回る日常的な出来事であった。いじめに対して、保護者の次に身近な大人である教師がどのような対応を取ったのかを、彼らは冷静に観察してきた。教職を志望する大学生は、学級担任をはじめとする教師たちから、いい意味でも悪い意味でも影響を受けている。

ところが、教職入門の授業で学生の発言や文章からうかがうと、彼らが、これぞという解決をした教師にあまり出会っていないようである。これについては5で述べる。

### 4 教職志望理由の分析

ここで、205名の作文に記された教職志望動機を分類してみる。一学生が複数の動機を書いていることから、それらをそのまま読み取って集計したものが下の表である。

205人中 単位(人)																
いじめ経験	不登校経験	不登校への理解	子どもへの期待	子どもが好き	学問が好き	教えるのが好き	部活顧問への尊敬	部活動そのもの	スポーツ指導員	出会った先生への尊敬	反面教師への反発	社会貢献したい	学校が好き	教育問題への関心	公務員・収入	漫画の影響
18	4	2	26	14	50	38	29	7	2	148	37	12	3	7	8	1

205名の作文に基づく

「教師を目指そうと思った理由」(600字)に書かれた内容を分類した。

ひとつの動機のみ書いた学生もいれば、複数の動機を書いた学生もいる。

一作文に複数の動機が書かれていれば、そのまま複数の動機として数えた。

教師を目指す動機としていじめ被害の経験を挙げた学生が17名、友人がいじめ被害に遭っていたことを動機に挙げた学生が1名、合計18名がいじめを契機に教職を志望した。

## 5 学生が考える「いじめ解決の方法」

では、学生たちは教師になって、いじめ問題にどのように対処していくつもりなのか。多くの学生がこの点に関して、正しい見通しをもっているかという不安が残る。正しい指導を経験していないために、どう対応すればよいか、分からない学生が多いように見えた。いじめ問題の正しい認識と確実な解決方法を教授していく必要性を感じ、いじめ問題を授業で取り上げた。

いじめを発見した時に教師としてどのように対応するかを問うたところ、多かったのが、次のような回答であった。

私は加害者を叱るようなことはしない。じっくり話を聞く。いじめをする子には理由がある。それをしっかり聞き出して心のケアをしなければ、いじめはなくなる。被害者への謝罪はその後だ。

このような回答をした学生に対し、筆者は次のように解説した。

いじめに理由があるという前提に立つと、加害者の行為は正当化され、いじめの行為そのものに対する指導ができないまま、時間だけが過ぎてしまう。その間、被害者は加害者が恐ろしくて登校できないかもしれない。被害者の立場を最優先で考えなければ、いじめ問題は解決できない。理由は関係ない。「いじめは絶対に認めない」という毅然とした態度で対応しなければ、被害者は永遠に救われない。加害者の心のケアは、いじめを絶対にしないと約束させた後に取り組むことである。(注2)

学生の多くが、回答した「叱らない」「じっくり聞く」「心のケア」という3つの項目が挙がってくる理由について、筆者は次のように考えている。

まず、「叱らない」「しっかり聞く」ということに関して。

学生はこれまで、クラスや学年でいじめを見聞きしてきた。その際、学級担任や学年教師の叱責だけで終結させてしまう指導を受けることが多かったのではないだろうか。一方的に叱られて、反省の念はあったものの、心のどこかで納得できず、教師への不満が残った。あるいは、傍観者であった生徒が、加害生徒の心情に近い立場にいて、加害生徒が叱られたのは理不尽だという感覚をもった。そこで、彼らは、「教師は子どもの心を分かっていない」という「学び」を経験した。

加害者側に寄り添った「心のケア」ということに関して。

「教師は子どもの心が分かっていないという経験」が、加害者に寄り添うケアを重視することにつながっている。しかし、最もケアすべきは被害生徒の心である。解決を失敗したり、不十分な解決にとどまったケースでは、仲直りしなさいという結論だけを生徒に押し付けて、生徒が心から納得しないまま、形だけ収束させようとしたことが考えられる。教師を目指す大学生でも、本物の「いじめの解決策」を知らないままで高校を卒業してきたのである。

「2 学生の作文」で紹介した、いじめ被害の経験者は、適切な解決策をとった教師によって救われた。しかし、幸運な学生はまだ少数派であるように思う。適切に解決した場合でも、その事実を一般の児童・生徒に知らせたかという問題がある。おそらく児童・生徒に周知してはいない。加害者、被害者双方に配慮して、学級や学年全体にいじめの報告をすることは、それほど多くないと考えられるからである。こうして、多くの児童・生徒の心には加害生徒への漠然とした同情が残る。

筆者の公立中学校での勤務経験を振り返っても、一般生徒への指導(事後報告)が十分であったと自信をもって言えない部分がある。今後のいじめ指導の課題である。



## 6 教育学部の役割

いじめ問題は教師が指導力を要求される重要課題である。教育学部の学生も関心をもっており、正面から向き合いたいという意欲がある。学生に対して、正しい解決の仕方を教授しておくことは教育学部の責任である。いじめは絶対許さないこと。いじめ被害者の人権を最優先で解決にあたること。解決にはスピード感をもってあたること。被害者の心のケア、加害者の心のケアは丁寧に全教員が意識的に行うこと。など、確実に理解させておくことが求められる。

## 7 おわりに

授業の進め方として、毎時間、学生に発言を求め、意見交換の場面を設けている。教師を志望する理由についての作文を書いた次の授業でのこと、いじめを契機に教師を目指したという学生に、さらに説明を求めた。いじめの経験を語る学生が話し始めると、皆、静かに聞き入った。実体験を話してくれた学生に対する尊敬の傾聴であった。辛い経験をあえて語ってくれた学生に対し、履修者全員から自然に拍手が湧きおこった。優しい学生たちである。

日を改めて行った、いじめ問題の解決についての授業では、『5 学生が考える「いじめ解決の方法」』で述べたように「叱らない」「じっくり話を聞く」と学生が発言したときに、いつもより大きな拍手が起こった。すべての子どもを受け入れる、という信念の表れなのだと理解しつつ、このとき、筆者はあえて、受け入れるだけではだめという持論を強く主張した。先述のとおりである。学生の中には不満そうな顔つきをしている者もあった。そんな彼らが実際に学校現場で、いじめに直面したらどのように考えるのであろう。

教師を目指す大学1年生の純粋な意欲を大切にしつつ、現場感覚をしっかりとった教職志望者に育てていかなければならないと考えている。「教職入門」の授業を通じて、いじめ問題に向き合う教師の役割について今後も考える機会を設けていきたい。

注1 国立教育政策研究所調査 『いじめ追跡調査 2010－2012』p.9 1.19

「ぜんぜんなかった」と答えている児童生徒の割合は、被害経験では10.8%から13.2%の間、加害経験では11.1%から14.7%の間で推移しています。

いずれにしても、毎回の調査時点で似たような値を示す「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率ですが、一部の特定の児童生徒だけが巻き込まれるのではなく、ほとんどの児童生徒が被害者にはもちろん、加害者になっても不思議ではない、被害者も加害者も大きく入れ替わりながらいじめが進行するという実態は、大きく変わっていないと言えます。

注2 『いじめを絶つ！ 毅然とした指導3』 山本修司編 教育開発研究所2012年

いじめ問題への対処に関する考え方を参考にした。